

平家物語と熊野参詣

大 洋 和 俊

はじめに

本稿は、『平家物語』と熊野が、登場人物の描き方と深く結びつき、物語の展開を切り開く軌軸であることを明らかにするものである。『平家物語』と熊野についてはその関係がこれまでも説かれてはいるが、熊野の信仰を支える管理者の側からの教導以上に、熊野への深い思いが登場人物の心に深く食い入り、彼らの行動を支え、敗者の側の復活、再生にとどまらず、勝利者であつたはずの平重盛、その子平維盛の拠り所として存在したことを明らかにしてみたい。平家方によって孤島に配流された平康頼、平成経という敗者、平清盛、平重盛という勝者の絆組を越える力として熊野は彼らの生き方を支えている。文字通り、個人を越える力として、「勝敗」という戦いの論理を越える内的衝動として熊野があつたことを分析してゆく。

一 平家繁昌と「すずき」

第一句 殿上の闇討

序（祇園精舎）

忠盛昇殿 殿上闇討

忠盛・季仲・家成五節の舞

忠盛申しひらき

忠盛和歌 忠度の母の事

第二句 三台上縁

忠盛死去 清盛官途

すずき

清盛五十一出家の事

かぶろの沙汰

兄弟左右大将

八人の娘

平家繁昌

とある。目次は、忠盛の栄達の過程と死去、ならびに清盛を中心とする平家繁昌の発端を語る「すずき」から「平家繁昌」までを語る。第一句と第二句は忠盛、清盛の事蹟により平家が地方の武士階級から鳥羽法皇の御感を得てやがて中央政界を独占する過程を示している。⁽¹⁾

熊野参詣とは主に紀伊路を「みそぎ」（禊）を繰り返しつつ熊野本宮に至る過程であり、熊野本

宮から熊野川を苦難のうちに下り、新宮（熊野速玉大社）に着き、さらに那智大社、那智の滝に行く。それは、海、川こそが重大な「経路」であり、正盛から忠盛、そして清盛に至る平家栄達の「経路」と深く結ばれている「場所」であることを示している。

海を起点にして平氏の繁栄を見る際、注目される記事は第一句の中では「忠盛和歌 忠度の母の事」である。

そのころ忠盛、備前^{ひぜん}の国よりのぼりたりけるに、鳥羽の院「明石の浦はいかに」と仰せければ、忠盛、

有明の月もあかしの浦風に

波ばかりこそよと見えしか

と申したりければ、御感ありて、やがてこの歌をば金葉集にぞ入れられける。（第一章）

右の逸話について、かつて次のように言及したことがある。

『平家物語』にはどれくらい数の和歌があるのかというと百首くらい。『源氏物語』の七九五首に比べるとかなり少ない。巻一の「鱸」に初めて歌が登場してきます。（中略）時代背景として、中世文学『平家物語』といえども王朝の伝統の流れを深く背負っていて、人々はこのように和歌によって自分の存在を証明したのですね。

「明石」は王朝以来の歌枕であるが、注目されるのは下句「波ばかりこそよと見えしか」の表現である。「よる」に「暮る」と「夜」を掛けてある、とは周知のことだが、「波ばかり」に注目すれば、沖合から海岸に向かってひたすら寄せて来る波に対するひたむきな眼差し、粘着力のある見方が表現の特徴として読みとれる。しかも寄り来る波が「夜」に掛けてあるので、上句の「有明の月」と相俟ってまだ暗い夜の海が波とともに際立つてくるのである。有明の月という王朝の恋歌的伝統にのって歌い始めながら、海を持つ備前の国司忠盛の、暗い夜の海と白い波頭をひたと見つめる眼差しがうかがえる一首である。それは一方、財力を獲得した忠盛が勅撰集に入首するという文化的栄光、宮廷人として認知される一大事件でもあった。

海との深い紐帯は続く「すずき」にも歌い継がれる。

そもそも、平家かやうに繁昌^{はんしょう}せられけることを、いかにといふに、熊野権現^{くまの ごんげん}の御利生^{ごりしょう}にてぞありける。そのゆゑは、清盛いまだ安芸守^{あきのかみ}にておはせしとき、伊勢の国安濃^{あかの}の津より船にて熊野へ参られけるに、大きな鱸^{ます}の、船にをどり入りたりけるを、先達^{せんたち}申しけるは、「むかし、周の武王^{しゅうのぶおう}の船にこそ白魚^{はくぎょ}はをどり入りて候ひしか。これをば参るべし」と申されければ、さしもの精進潔斎^{しょうじんけっさい}の道なれども、みづから調味^{てうみ}して、わが身食^{みく}ひ、家の子、郎等^{らうどう}どもに食はせられけるゆゑにや、子孫^{こくそん}官途^{くわんと}も龍の雲にのぼるよりもなほすみやかなり。九代の先蹤^{せんそう}越え給ふこそめでたけれ。（第二章）

清盛の熊野参詣は、途中船を用いる伊勢路であつた。通常、紀伊路を用いるのが公式のルートで

あり、紀伊路でも近距離は船を用いることもあったが、伊勢国安濃津より乗船し、熊野参詣を試みた記述からすると、海路によるものであった。とりわけ、大きな鱸が「船にをどり入り」、それを清盛自身調理して、家の子、郎等も共食いしたことが平氏の子孫の迅速な官途昇進である、と説いている。スズキは「出世魚で幼魚はセイゴ、やや成長したものはフッコ、成魚はスズキ⁽³⁾」とある。スズキの調理、さらには一族、郎等による共食は神社仏閣への参詣にあたって実修しなければならない精進潔斎の方式からすれば極めて異例である。しかし、その異例こそが、その後、平氏繁昌と相俟って熊野の存在を強く確定する平家物語の論理として位置づけられてゆく。

それは様々な「不思議」、人知を越えたことを積極的に語る『平家物語』の結構とも通じるものであろう。

清盛、ならびに平氏の繁昌は現実の武力、政治力ではなく、一種の奇瑞として「スズキ」のモノガタリを語り出している。それは、熊野に依拠することが善き事、わが身を招福へと導くという物語の巧まざる結構として置かれたのである。

二 熊野参詣と今様

伊勢から船に乗っての熊野参詣はスズキが船に飛び入る事で、海の道を強く意識させる逸話であったが、平氏打倒を企て、絶海の孤島に流された俊寛、康頼、成経の話も海を強く意識する物語である。「第十八句 三人鬼界が島に流さるる事」には次のようにある。

さるぼどに、法勝寺執行俊寛、平判官康頼、備中の瀬尾におはする少将あひ具して三人薩摩方鬼界が島へぞ流されける。この島は、都を出でてはるばると海を渡りてゆく島なり。

(第三章)

第十八句冒頭は、三人が「鬼界が島」へ流されたことを語る。島の名は人間界を離れた場所を想い起こさせるし、本文は「都を出でてはるばると海を渡りてゆく島」と記すことで、「異境」は更に増幅されている。

おぼろけにては舟も人もかよふことなし。島にも人まれなり。おのづからある者はこの地の人にも似ず。色くろうして、牛なんどのごとし。身にはしきりに毛生ひ、言ふことばも聞き知らず。男は烏帽子も着ず、女は髪をもさげず。衣装なければ人にも似ず、食する物なければ、ただ殺生をのみ先とす。

(第四章)

第二章はその島が絶海の孤島であることを記したあと、そこに住む者が牛のごとき姿をし、体には毛が生え、言葉の意味も不明であると説き、そこが人間の住む所ではない異境であることを強調

する。男は烏帽子をかぶらず、女は髪を下げず、衣装も食料もないことで、そこが辺境の地であることを説く。

人が人として存在価値を認められず、山嶺には火が燃え、雷が絶えず鳴り、麗には雨が激しく降る土地。それは絶大な権力を振るつた法勝寺執行俊寛、平教盛を舅とする成経、美声の持ち主として法皇に愛された平康頼にとって想像だにしない世界であつた。

『平家物語』は都から遠く、海をはるばると渡つた辺境の島の「異状」をつぶさに書き連ねることとで三人の肉体的、精神的な疲弊を描き出している。そして「米穀のたくひもなし。(中略) 絹綿のたくひもなかりけり」と付加されることで一層苦酷さを増すものとなつてゐる。肉体的、精神的、さらには自分の都での地位すら無にする苦酷な場所に三人は取り置かれたのである。

そこで、成経、康頼の行動は次の行動に出る。

少将、判官入道は、もとより熊野信仰の人にて、「あはれ、いかにもして、この島のうちに熊野三所権現を勧請したてまつり、帰洛のことを祈らばや」といふに、俊寛これを用ひず。二人は同心して、「もし熊野に似たる所やある」と、島のうちをだづねまはる(中略)

(第五章)

熊野信仰の成経、康頼は本宮、新宮、那智に似ている所を探し求め、百尺の滝のみなぎり落ちる所を飛滝権現のいる「那智の御山」と名付け、この峰を本宮、あの峰は新宮、そして熊野参詣の折の九十九王子をここ、かしこに比定し、名を申し上げたのである⁽¹⁾。

実際の熊野を想起し、似ている場所を探し当て、「名付ける」ことで、二人は熊野参詣を「体験」したのである。その趣旨は、

毎日熊野詣のまねをして、帰洛のことをぞ祈られける。「南無権現金剛童子、ねがはくはあはれみをたれさせおはしまし、われらをふたび都へかへし入れて、恋しき者を今ひとたび見せ給へ」とぞ祈りける。

(第六章)

というものである。この「疑似体験」はその後、少将成経に夢と現実のはざまの事として化現する。沖から小さな舟が一艘漕ぎ来たり、赤い袴、帯を身に付けた五・六人の女房が誠に面白い声で次のようなウタを歌うのである。

よろづの仏の願よりも
千手の誓ふたのもしき
枯れたる木にもたちまちに
花咲き実なるとは聞け
と二三返歌ひすまして、かき消すやうに失せにけり。そのとき二人の人々、「うつつなりけり」と奇異の思ひをなす。

(第七章)

千手とは千手観音のこと、ウタは千手観音の誓いの功により、枯木にもたちまちに花が咲き、実になるというものである。それは死んだものが復活し、その生命を再生することを意味するものであった。そのウタを歌った女房たちがかき消すように姿を消したことで康頼たちはそれを現実のこととして受けとめている。

死んだものが蘇生・復活し、歌い手が姿を消すことは「奇異の思ひ」と書かれるが、この「不思議」こそが現実を揺り動かすとは『平家物語』の常套表現であった。

この権現の本地、千手観音にておはします。千手の二十八部衆のうちに、海龍神、その一つなり。されば龍女の化現にてもやあらん」とたのもしかりしことどもなり。(第八章)

二人は那智の本地仏が千手観音であることを想起し、龍女の化現としてウタを中核とする「奇異の思ひ」を帰洛への確信として受けとめたのである。肉体的、精神的に疲弊した者の願いを叶えるのは政治的策謀ではなく、夢と現実の間にあらわれる「奇異」、「不思議」と呼ばれる人知を越えたものであり、熊野は人々の願いを現実のものに変える力として物語に大きな位置を占めている。

平家物語に「よろづの仏の」と記される今様は流人、頼康や成経の復活、再生を象る「奇異」として描かれるが、現実の記録の上にも記されている。

応保二年正月廿一日より精進を始めて、同廿七日発つ。二月九日、本宮奉幣をなす。三御山に三日づつ籠りて、そのあひだ、千手経十巻を転読したてまつりき。同月十二日、新宮に参りて奉幣す。その次第つねのことし。夜ふけてまたのぼりて、宮巡りののち、礼殿にして通夜。千手経を誦みてまつる。しばしば人ありしかど、片隅に眠りなどして、前には人も見えず。通家で、経巻くとして眠り居たる。やうやうの奉幣などしづまりて、夜中ばかり過ぎぬらんかしとおぼえしに、宝殿の方を見やれば、わづかの火の元に、御正体の鏡、所々輝きて見ゆ。あはれに心澄みて、涙もとどまらず。泣く泣く誦み居たるほどに、資賢、通夜し果てて、暁方に礼殿へ参りたり。「今様あらばや。只今おもしろかりなんかし」と勧むれば、固まりて居たり。術なくて、みづから出だす。

万の仏の願よりも 千手の誓ひぞ頼もしき 枯れたる草木もたちまちに 花咲き実熟ると
説いたまふ

押し返し押し返し、たびたびうたふ。資賢・通家、付けてうたふ。心澄ましてありし故にや、つねよりもめでたくおもしろかりき。覚讀法印、宮巡り果てて、御前なる松の木のもとに通夜して居たりけるに、その松の木の上に、「心解けたるただ今かな」とうたふ声のしければ、夢現ともなく、かく聞き、あさみて、礼殿に参りて急ぎかたる。一心に心澄ましつるには、かかることもあるにや。夜明くるまでには、うたひ明かしてき。これ二度たびなり。

後白河院の著である『梁塵秘抄口伝集』は次のように説く。

卷十―これは完本で、後白河天皇の今様をめぐる自叙伝であり、当代の芸能界が活写されており、資料的価値に富む。(中略)平康頼・藤原親盛……十数人の近臣らの今様の芸評がある。^⑤ここで『梁塵秘抄口伝集』と『平家物語』の「よろづの仏の」に始まる今様について両者を比較してみる。

あるとき、少将、判官入道二人、権現の御前に参り、通夜したりけるに、夢ともなく現ともなきに、^⑥沖より小船一艘寄せたり。例の海人小舟、釣舟かと見るほどに、磯によりて、赤きはかま着て、懸帯などしたる女房の五六人、御前に参りて、世にもおもしろき声にて

(第九章)

として今様が謡い出されている。傍線部で示した部分、特に「通夜」、「夢ともなく現ともなき」は『梁塵秘抄口伝抄』にも傍線部Aで示したように同様の言葉が見られる。『梁塵秘抄口伝抄』は今様の前と後に「通夜」が繰り返して記され、それが特に重視されている。『平家物語』の方は、「通夜」は一回のみで、かつ神霊の依る松の木が二度記される。『梁塵秘抄口伝集』に比べ熊野権現の神託影向が希薄とはいえ、両テキストともに通夜の折、夢うつつの区別もつかない心の状態で今様が化現し、そこに「奇異の思ひ」をなしたことは共通している。『平家物語』は「二人の人々、『うつつなりけり』と奇異の思ひをなす」として、今様が現実の事として受けとめられている。『梁塵秘抄口伝抄』が実際の熊野参詣に於ける体験を示し、今様が熊野権現の神託の声として後白河院の耳に届いたことを表しているとなれば、都への帰洛をひたすら祈る康頼、成経にとって今様は彼らの願いを叶える方向を強く示唆するものとして「うつつなりけり」の実感と喜びの表現として受けとめられているのであつた。康頼は後白河院の近臣として今様の名手であつたが、『平家物語』では今様が故郷帰洛を願う利生として強く打ち出されているといえよう。特に、沖の方から小舟が磯に向かつて寄る記述からは海上から漂着するものが至福をもたらすとの信仰がうかがえるばかりか、赤い袴、懸帯をしている女性が舟に乗っている姿は速五大社の御船祭の姿に通底するものがあるか。那智社は千手観音が本地仏で、「千手の誓をたのもしき」の後に

「この権現の本地、千手観音にておはします。千手の二十八部衆のうちに海龍神、その一つなり。されば龍女の化現にてもやあらん」とたのもしかりしことどもなり。(第十章)

と、さながら先の今様の「解説」のような記述が付加されていると見れば、今様こそ那智の水神、龍神信仰の化現として康頼、成経に受けとめられ、水垢離や岩田川、発心門を観想する記述は、荒涼とした場所であるはずの「鬼界が島」が熊野の霊現を示す場所と同時に、その利生の明らかであることを強く示唆することで、都帰洛、家族との再会へ願う康頼、成経の心意として、物語のあらたな展開を導いてゆくのである。

ちなみに『平家物語』の古態といわれる『延慶本平家物語』ではその記述は詳細を極めている。

手ニタラヒ、身ニコタヘタル事トテハ、入江ノシホ、沢辺ノ水ニカク「コリ計也。朝夕ハ南無慚愧懺悔六根罪障と懺悔シ、心ニ心ヲ誓テ、僅ニ半日ニ行帰路ナレド、同所ヲ行帰リく、白浪サベナミ凌ギツ、漫々タル蒼海ニタゞヨヒ、塩風波間ノコリノ水、何度ト云数ヲ不知。浦路浜路ヲ行時ハ、鹿ノ瀬、藤代、カブラ坂、十条、高原、滝ノ尻トモ觀念シ、石岸イハホ高クシテ、青苔アツクムシ、万木枝ヲマジヘテ、荒草道ヲフサゲル谷川モアリ。東岸西岸ヲ渡ル時ハ、岩田川ヲ思出テ、煩惱ノアカラス、ギ、近ツビ、湯ノ河、三ノ河、思遣レテ哀也。冷キ木陰ヲ行時ハ、九品ノ鳥居ヲ口今トナルト思ナシ、大ナル木ノ本ニ立寄テハ、上品上生ノ心地發心門トモ觀「念ス。比山路、海岸ノ間ニ、波間ニミユル石モアリ。青黄赤白ノ石モアリ。男女僧形ノ石モアリ。岩ノハザマ、苔ノ庭、稻ノ村立、常葉木目ニカ、リ、心ノ及ブ所ヲバ、撰津窪津ノ王子ヨリ始テ、八十余所ノ王子々々トゾ伏拝ミ給ケル。

『延慶本平家物語』は北から南へ参詣する地名を正確に記し、さながら参詣記の趣きを見せている。旅日記のように实景を重視しつつ、土地を通過してゆく様が克明に写しとられているのが古態『延慶本平家物語』であった。

二 ウタによる帰洛の方途

数多くいる仏の中でもとりわけ千手観音の誓願に帰洛の成就を強く示唆された成経や康頼にその願いを確信させる出来事が起こる。

あるとき、沖より吹きくる風の、少将、康頼二人が袖に木の葉一つづつ吹きかけたり。これを取りて見れば、たのみをかくる御熊野の南木の葉にてぞありける。虫くひあり、これを一首の歌にぞよみなしたる。

ちはやぶる神に祈りのしげければ

などか都へかへさざるべき

かへすがへすも、めでたかりける事どもなり。

(第十一章)

冒頭の書き出し、すなわち「沖より吹きくる風」が虫食いの葉を運んでくる結構は、先の「あるとき」、「沖より小船」と同工異曲である。沖から寄り来たるものが「ウタ」を運び、それが流人の祈りである帰洛を示唆する今様(「千手の誓い」)から、確信の和歌(「ちはやぶる」)に昇化してゆく。「通夜」によるひたぶるな実修、絶えることなき作善を百二十句本は「御幣の紙もなければ、花を手折りて捧げつつ、康頼入道つねは、祝言を申しける」と記している。二人の絶えざる熊野信心の思いは「ちはやぶる」の和歌の「祈りのしげければ」の言葉に集約、凝縮されていよう。それは熊野にひどい辛苦を重ねてなお幾たびも参詣する諸記録、紀行の和歌による明確な表白である。しかも以前の「千手の誓ぞたのもしき」がそれを聞く側の思いとして語られるものに比べて、「ちはや

ぶる」の和歌は康頼、成経の熊野の名を申し、名付ける行為、見立てた場所を巡り、観想し、実地に礼拝、水こりを重ねる修行を認知する言葉「ちはやぶる神に祈りのしげければ」として定位した上で、「などか都へかへささるべき」と、熊野の神の側から康頼たちの帰洛の願いを保証する歌となっている。

前者今様に深く依拠する聞き手の側から、神の託宣として二人の帰洛が確実である、と和歌は二人の再生を保証する言葉として書き記されている。それは編者の「かへすがへすも、めでたかりける事どもなり」の付加表現と一体となり、困窮疲弊の状況にある二人だけでなく、『平家物語』の状況を復活、再生へと導く事として捉えることができるだろう。

判官入道、あまりに都の恋しきままにせめてのはかりごとに、千本の卒都婆^{そとば}を作り、阿字^あの梵字^{ばんじ}を書きて、年号、月日、仮名^{かみょう}、実名^{じつな}、さて二首の歌をぞ書きたりける。

さつまがたおきの小島にわれありと

親にはつげよ八重^{やへ}のしほ風

思ひやれしはしとおもふ旅だにも

なほふるさとは恋しきものを

(第十二章)

康頼の二首は従前の今様や虫食いの託宣歌とは異なる点に注意が必要であろう。すなわち、先の今様は「夢ともなく現^{うつ}ともなき」状況で「千手^{あふら}の誓^{ちか}えたのもしき」の言葉が「外側」ともいえる「沖」から寄り来たつたものであり、虫食いの託宣歌も「沖より吹きくる風」によって運ばれてきたものであった。

ところが、「さつまがた」に始まる二首の和歌は康頼入道の切なる願い、「あまりに都の恋しきままに」という「内側」からあふれ出た言葉であった。その歌を書き付けた卒都婆には年号、月日、肩書、本名が記されることでみずからの意志、姿勢を表白する歌となっている。その歌の意も「八重の潮風」に下命する態の力強い呼びかけであった。自然の風に訴えてこの小島に自分がまだ生きて在ることを親に告げ知らせよ、というのである。

そして二首目は、遠い孤独に帰るあてもなくいるわが境涯をわかつてほしい、しばしの旅でさえ故郷は恋しい。ましてわが身はどうなるか、と内面の思いを吐露している。

辺境にあつて家族のいる都を思う。それは歌の言葉によって辺境が都と結び付くことを強く訴えるものであった。辺境が辺境でない所に転位してゆく。歌は絶望の淵にある康頼の願いを行動に変え、毎日卒都婆を浪の寄りくるたびに海に浮かべる行為へと導くのである。

四 卒都婆伝承と和歌の威力

海への熱い眼差しは次のように記される。

奥津白波の寄せてはかへるたびごとに、卒都婆を海にぞ浮かべける。日数かさなれば、卒都婆の教も積もりけり。その思ふ心やたよりの風ともなりたりけん、また神明仏陀もや送らせ給ひけん、千本の卒都婆のうち一本は、安芸の厳島の大明神の御前のなぎさに、うちあげたり。

(第十三章)

冒頭の「奥津白浪の寄せてはかへるたび」は『伊勢物語』第七段を踏まえた言葉であらう。

伊勢、尾張のあはひの海づらを行くに、浪のいと白く立つを見て、

いとどしく過ぎゆく方の恋しきに
うらやましくもかへる浪かな⁽⁸⁾

(園点、大洋)

さらに言えば、『平家物語』の右の冒頭文は「奥つ白浪の」8音、「寄せてはかへる」7音、「たびごとに」5音、「卒都婆を海にぞ」8音、「浮かべける」5音、というように和歌のリズムを巧みに取り入れている。「日数かさなれば」8音、「卒都婆の教も」7音、「積もりたり」5音と続くのである。しかも「浮かべける」、「積もりけり」と、「けり」を重ね、「なりたりけん」、「給ひけん」と「けん」と、類似の助動詞を重ねてリズム感ある文章に仕立てている。

そして、何よりも叙景と叙情が一体となっている点が右の文章の特徴である。浪が「かへる」には都に帰る思いが、「浮かべける」には自分の思いを浮かべ、「教も積もり」には自分の思いが積もることを懸けてある。「その思ふ心」は「たよりの風」と連なり、景と情とが巧みに縫り合わせられながら文章は展開してゆく。「千本」と「一本」の対比に卒都婆への熱い眼差しを見せつつ、「うちあげたり」の景は積もる思いの一つの到達を感動的に歌いあげている。

海の浪への眼差し、その流離の行程はさらに物語を織りなしてゆくものとなる。

社には海をうけたれば、潮のみちて月ぞ澄む。汐みちくれば、大鳥居のうちの廻廊、緋の玉垣、瑠璃のごとし。汐ひきぬれば、夏の夜なれども御前のなぎさに霜やおく。

(第十四章)

対句的手法のうちに厳島の荘厳さを描きつつ「海」、「汐」、「夏」と「霜」というように、海への一貫した眼差しがある。「御前のなぎさ」は、先の「御前のなぎさに、うちあげたり」に呼応した表現である。広大な海を流離した卒都婆は荘麗な安芸厳島の、汐の満ち、引く社殿へと迎え入れられてゆくのである。

判官入道がゆかりありける僧の、西国修行してまよひありきけるが、厳島へぞ参りたりける。この島は潮のみつときは海になり、潮のひくときは島となる所なり。「それ^わ和光^{わこう}同塵^{どうじん}の利生^{りしやう}、さまざまなりと申せども、この島の明神は、いかなる因縁をもつて、海漫々の鱗に縁をむすばせ給ふらん」と、本誓^{ほんせい}のたつときに、ひめもす、法施^{ほつせ}まゐらせてゐたるところに、沖よりみちくる汐にぞそはれて、それかともなく打ちあげたる藻くづの中に、卒都婆のかたちの見えけれ

ば、なにとなくこれをとって見るに、「おきの小島にわれあり」と書きながしたる言の葉にて
ぞありける。文字は彫りいれ、きざみつけたれば、波にもあらはれず、あざやかにこそ見え
りけれ。
(第十五章)

傍線部で示した最初の部分は厳島と海との深い由縁を語りつつ、信仰の縁起を明らかにしている
のだが、それを背景として「沖よりみちくる汐にさそはれて」発現するのが康頼の彫つて卒都婆に
記した「おきの小島に」の和歌である。沖の小島と厳島とが「汐」の言葉によって結び付けられ、
卒都婆の言葉は波に洗われることなく、鮮明に西国修業の僧の目に映じる。

そして、卒都婆は都にいる康頼の母、妻子に届けられ、後白河法皇、平重盛、平清盛へと、「卒
都婆伝承」として物語を紡いでゆくのである。卒都婆に書き彫られた歌の力が都と沖の小島を結び
とめ、仏教の法具である卒都婆は歌の言葉と相俟つて、勝者と敗者という政治的力学を越えてゆく
力として物語を織りあげてゆく。

物語作者が和歌への強い関心を持っていたことは次の、さらなる本文によつて明らかであろう。

柿本の丸は、「鳥がくれゆく舟」を思ひ、山辺の赤人は、「あしべの鶴」をながめ給ふ。住
吉の明神は、「かたそぎの思ひ」をなし、三輪の明神は、「衫たてる門」をとどす。素盞鳴尊
は、三十一字をはじめおき給ひしよりこのかた、もろもろの神明、仏陀も、この詠吟をもつて、
百千万端の思ひを述べ給ふ。
(第十六章)

歌聖柿本人丸、叙景の名手である山辺赤人から説き起こし、住吉と三輪の明神へと展開し、『古
事記』の素盞鳴尊の「八雲たつ」の歌にまでさかのぼる形で、和歌の威力を解きあかそうとする。
和歌の始祖伝承を背景として康頼の歌の「思ひ」の深さを示そうとしたのである。

こうして、康頼の「卒都婆伝承」は次のように結びとめられている。

されば、たかきもいやしきも、「鬼界が島流人の歌」とて、これを口ずさみぬはなかりけり。
千本におよび作りたる卒都婆なれば、さこそは小さうもありけめ、薩摩がたよりはるばると伝
はりけるこそ不思議なれ。あまりに思ふ心のふかきしるしなりけるにや。
(第十七章)

康頼の和歌は「鬼界が島流人の歌」として貴賤を問わず、人々の間にあまねく流布して歌われて
ゆく様子を『平家物語』は語る。「卒都婆伝承」は、和歌の伝統を背景にしつつ、当代の人々の心
に強く訴えかけるある言葉として歌い継がれてゆく。それを『平家物語』は例のように「不思議」
と評しつつ、それを越える態で「あまりに思ふ心のふかきしるしにや」と結ぶ。

「思ひ」の深さが和歌に結実し、流離の浪に漂った「卒都婆」は広く人々の心に訴える「言葉」
として語り継がれ、物語作者の構想である「不思議」を越えている。

(平成二十四年十月三十一日)

- 注(1) テキストは新潮日本古典集成『平家物語』に拠る。以下同じ
- (2) 「静岡県歌人協会会報」183号(平成24年3月10日)
- (3) 『日本語大辞典』講談社、1037頁
- (4) 紀行文「いはぬし」『熊野古道』(群書類従 卷第三百二十七) P19に「めぐりて」とあり、『平家物語』に似た表現がある。
- (5) 『日本古典文学大辞典』1030頁
- (6) 注(1) 同書、P178 頭注三
- (7) 『延慶本平家物語』勉誠社185頁、186頁
- (8) 石田穰二訳注『伊勢物語』角川文庫版20頁
- (9) 『平家物語』の二首の和歌は柿本人麿以来の和歌伝承を呼び起こすことで思いの深さと同時に辺境―
 厳島―都のルートを説きあかしている。

